



財団法人 日本植物調節剤研究協会
元会長 吉沢長人氏
平成20年9月5日 逝去（享年87歳）

吉 沢 長 人 氏 主 歴

大正 11 年 6 月 1 日 長野県生まれ

職 歴

昭和16年 7月	農林省入省（農政局農産課）
昭和36年 8月	同 振興局研究部企画官
昭和36年11月	同 農林水産技術会議事務局研究調整官補佐
昭和40年 1月	財団法人 日本植物調節剤研究協会 技術部長
昭和42年 6月	同 事務局長
昭和44年 3月	同 常務理事
昭和52年 5月	同 専務理事
昭和62年12月	同 会 長
平成 2年12月	同 顧 問

受 章 歴 等

昭和56年10月	科学技術庁長官から科学技術振興功績者表彰 (水田における除草剤使用技術の普及啓発)
昭和60年11月	藍綬褒章 (農業振興功勞)
平成 5年 4月	勲四等瑞宝章 (多年農林水産行政に従事し関係団体の要職にあつて、組織の育成強化に 尽力するとともに、農薬の開発普及に取り組み農業振興に寄与)
平成10年 3月	日本雑草学会会長から日本雑草学会技術賞 (水稻除草剤の投げ込み方式による省力的試用技術の開発)
平成12年 3月	中国農業部農薬検定所長から感謝状 (日中雑草防除技術交流の一環として中国雑草図鑑刊行に多大な貢献)

吉沢長人元会長のご逝去を悼む

(財)日本植物調節剤研究協会第6代会長吉沢長人氏は、東京女子医科大学病院にての病氣療養の半ば、平成20年9月5日の早朝、併発された肺炎のため逝去されました。享年87歳でした。

吉沢氏は協会創設以来、45年間の長きにわたり、除草剤の効率的な使用に関する開発を命題に、心血を注がれての生涯でした。

生前のご指導に感謝し、さらに吉沢氏の業績を讃え、謹んで哀悼の意を捧げます。

吉沢氏の著書「除草剤開発の思い出」に、協会を設立された当時のことが詳しく記載されていますが、特に印象的なことは当初、資金調達のため一人で関係会社を回り協力を仰いだという苦労話であり、そのことは折に触れ後輩にもよく話されておりました。そして協会設立当時、速やかに除草剤の利用を広め、如何に雑草管理の効率化を図るかに情熱を注がれていました。その結果、除草剤の使用面積が次第に拡大し、それに符合して除草労働時間が短縮されてゆく様子を実感するにつけ、ことのほか満足しておられたようでした。これは若い頃に自らが体験した辛い手取り除草からの解放という一念の思いに根ざしたものだったにはかなりません。そして毎年の除草剤使用面積統計を纏める度に「もっと伸びているだろう？」と再調査を命じられたことも幾度かありました。

しかし数年が過ぎた昭和51年、「除草剤が安易に使われ過ぎてはいないか」と呟かれたかと思うと、「対象雑草幅の広い、且つ残効期間の長い除草剤を作ろう」と号令されました。それが今の水田一発処理剤開発の発端となるものでした。そして昭和57年に一発処理剤の普及が開始されるはこびとなり、その後の一発処理剤の使用拡大に伴い、水田除草剤の使用量は少しずつ縮小して行きましたが、吉沢氏はその数字を確かめながら、かすかに頷いておられた姿が思い出されます。その時期の吉沢氏の頭の中には、除草剤使用と環境影響という今日的にも大事な要素がすでに駆け巡っておられたようであり、その先駆的な物の考え方には感銘するばかりです。

さらに1キロ粒剤の提唱の狙いは、輸送費や倉庫保管などのコスト低減や散布作業の軽量化ばかりでなく、それまでの3キロ粒剤の使用量が10アール当たり3～4キログラムと幅があったのに対し、有効使用量を1キログラムのみに絞り、より効果的な使用を安定的に進めることも、その目的の一つでした。

このように除草剤使用に関する様々な問題へ取組まれ、その成果が着実に実を結んでゆくことができたのは、吉沢氏が協会設立後、確固たる基盤として築き上げておられた全国規

模の試験体制によるものであります。そしてその後もその体制が十分な機能を発揮してきたことにあります。

その後吉沢氏は究極の省力技術とも言えるジャンボ剤の開発を提案されました。しかし吉沢氏が思い描いていたような製剤が一年経っても実現できてこない状況をみて、待てずに「植調研究所内に製剤の研究室をつくろう」とまで言い出されました。さすがこの時には、我々としてはかなりの焦りを感じたものでした。その構想は思いとどまることになりましたが、その議論の結果から派生したのが、薬剤開発の初期段階から圃場の条件下でスクリーニングが行えるようにと考えた、1 圃場全体を温室化した所謂「圃場温室」と呼んでいる施設です。この施設は新規に合成された薬剤選抜期間の短縮化を図ることが第一の目的で、今もなお、植調研究所で年間を通し多目的に活用されています。この施設の利用法について国内の除草剤開発会社ばかりか、USA、イギリス、ドイツ、スイス各国にも出向いて、関係する会社に説明されるほどの熱心さでした。

「植調協会の名前の中に研究の字があるのは何のためだ？」が折りにつけ、吉沢氏の口から発せられる言葉でした。吉沢氏には、じっと佇んでいる時間はありませんでした。指示されたようにことを進めても「違う。こんな考えで進めるんだ」と前回の指示とは全く逆の方向性を示されることは一度や二度ではなく、実のところそれには困らせられました。しかし「毎日、毎年、状況は変わってるんだ」のひと言に、いつも何とか納得せざるを得ないことが多々ありましたが、吉沢氏の前向きで柔軟な言動が植調協会の原動力になっていたのではないかと思います。吉沢氏の植調協会着任当時と現在とでは、雑草防除技術は革新的な変化・進歩を遂げており、その礎となった吉沢氏の貢献は偉大なものであったといっても過言ではないでしょう。

また日本で開発された薬剤について、海外での試験データが取れるようにと、ブラジルにも試験地を築かれたこと、さらに長年の中華人民共和国への技術指導により、中国農業部農薬検定所長からの名誉顧問としての推戴等々は、日本国内のみに止まることのない吉沢氏の行動力の大きさを物語るものといえましょう。そして吉沢氏は、技術開発について自身と意を共にし、協力を頂いた多くの関係者の方々に対し、常に感謝の気持ちを忘れない方でもあったことを付け加えておきたいと思います。

吉沢氏の築いてこられた雑草防除の効率的且つ省力化技術を受け継ぎ、今後なおも努力を続けてゆくことが、植物調節剤の研究開発および普及に携わるものの課題と考えます。

吉沢長人氏のご冥福を心からお祈り申し上げます。

〔(財) 日本植物調節剤研究協会 竹下孝史〕